地域包括ケアシステムを見据えた精度管理調査解析方法の試み

◎渡邉 勇気[1)]、陰山 友希[2)]、山本 康博[3)]、芝原 裕和[4)]、中町 祐司[5)]、佐藤 伊都子[1)]、千田 園子[6)]、狩野 春艶[7)]
国立大学法人 神戸大学医学部附属病院[1)]、一般社団法人 姫路市医師会[2)]、医療法人川崎病院[3)]、労働者健康安全機構 神戸労災病院[4)]、神戸大学医学部附属地域医療活性化センター[5)]、兵庫県立こども病院[6)]、兵庫医科大学病院[7)]

【はじめに】兵庫県臨床検査技師会の精度管理調査（兵臨技サーベイ）は今年度で41回目を迎える。臨床化学検査では目標値を設定して評価するターゲットバリュー方式で評価を行い、全項目目標値設定も今年度で14回目である。サーベイに用いる試料は、市販の管理試料の他にプール血清を使用している。近年ドライケム試薬やベットサイド機器（POCT検査機器）が増加しているとともに、地域包括化ケアシステムの導入によりクリニックなどの精度管理調査の需要も増大している。今回プール血清においてドライケム試薬もウエット試薬と共通の目標値を採用するとともに、検査機器の使用目的（精度）に合わせて許容幅を設定して解析を行ったので報告する。

【解析方法】日本臨床検査技師会の精度管理システム（JAMTQC）を利用して解析を行った。目標値は正確度や精度が確認されている6施設で測定し、最大値と最小値を除去した4施設の平均値を用いた。兵臨技サーベイの評価はAからCの3段階で行い、許容幅は「臨床検査精度管理の定量検査評価法と試料に関する日臨技指針」から現在の技術水準を考慮した施設間の許容誤差限界をもとに設定した。Na、K、Cl、CRPについては、ウエット試薬使用機器のうちPOCT検査機器等で、評価Bの許容幅をNa（3.3% → 6.4%）、K（5.5% → 7.3%）、Cl（5.9% → 7.4%）、CRP（15.7% → 20.0%）と設定した。ドライケムについては、全ての項目で目標値は共通のものを使用し、検査機器に応じた許容幅を設定した。

【結果】ウエット試薬使用機器において、令和2年度の評価Cの数は8件（総数2657件）で、令和元年度の28件（総数2581件）と比較すると減少した。またドライケムにおいては、令和2年度の評価Cの数は6件（総数211件）で、令和元年度の13件（総数254件）と比較すると減少した。

【まとめ】POCT検査機器等に対してより妥当な許容幅を設定することで、分析機器の性能に応じた評価が可能となり、プール血清では、すべての検査機器で共通の目標値を用いた評価が可能となった。

神戸大学医学部附属病院　078-382-6317